

梵文和訳『牟尼意趣荘嚴』

— 一切法解説前半部 —

李学竹・加納和雄・横山 剛

はじめに

千五百年以上にわたって存続してきたインド仏教、とりわけ、大規模な僧院中心の仏教は、13世紀のヴィクラマシーラ寺院の破壊によって歴史に幕を下ろす。その終焉期、碩学アバヤーカラグプタは、仏教総論ともいえる大著『牟尼意趣荘嚴』(*Munimatālaṃkāra*)を編んだ。そこには、仏教の戒律、世界観、真理観、修行道、仏身論などが網羅されており、仏教思想(*munimata*)全体を荘嚴する(*alaṃkāra*)という本書の題名にふさわしい内容となっている。

本書においてとりわけ特異かつ顕著なのは、その体裁である。本書は、梵文貝葉にして202葉におよぶ大著であるにもかかわらず、奇妙なことにアバヤーカラグプタ自身の文章はあまり含まれていない。すなわち本書は、先師たちの諸著作を寄木細工のように地の文に組み込んで編まれた作品となっている⁽¹⁾。このような特異な体裁ゆえに、本書は梵文原典の失われた作品の断片を提供することがしばしばある。本稿において扱う一切法解説箇所は、やはり梵文原典が未発見であるチャンドラキールティの『中観五蘊論』(*Madhyamakapañcaskandhaka*)に大きく依存している⁽²⁾。本稿では『牟尼意趣荘嚴』の梵本当該箇所の和訳を提示して『牟尼意趣荘嚴』の原典研究を行うと同時に、それによってチベット語訳でしか残らない『中観五蘊論』の基礎資料を提示しようとするものである⁽³⁾。

(1) このような著作理念はアバヤーカラグプタの他の著作にも一貫してみうけられる。

(2) 『中観五蘊論』と『牟尼意趣荘嚴』の関係の詳細については、横山(2014)を参照。『中観五蘊論』のタイトル、範疇論解説の性格、中観派的特徴などについては、横山(2015)並びにYokoyama(2015)(2016)を参照されたい。

(3) 本稿の著者の一人である横山は、『牟尼意趣荘嚴』における一切法の解説を踏まえながら、『中観五蘊論』の蔵訳校訂本とその和訳の製作を進めており、近くその成果を公開することを予定している。

先行研究

『牟尼意趣莊嚴』のチベット訳の研究は磯田、カプスタイン、赤羽、横山などによりなされ、梵文校訂は李、加納によってなされてきた。本書は全4章からなる。すなわち、第1章「菩提心明示」(bodhicittāloka)、第2章「菩提心修習明示」(bodhicittabhāvanāloka)、第3章「八現觀明示」(aṣṭābhisamayāloka)、第4章「仏徳明示」(guṇāloka)である。本稿は第1章の一部を扱うものであるが、同章の全体についての研究状況は以下の通りである。

[第1章の概要]

冒頭偈 (Ms 1v1, D 73v1)	加納・李 (2013) が梵文校訂・和訳
序文 (発心) (Ms 1v3, D 74r6)	加納・李 (2013) が梵文校訂・和訳
律儀戒 (Ms 2r4, D 74v1)	加納・李 (2013) が梵文校訂・和訳 (部分) 磯田 (1981) が概観
六波羅蜜 (Ms 13v3, D 89r4)	磯田 (1983) が一部概観
衆生世間 (Ms 35v3, D 113r6)	磯田 (1991) が蔵文和訳
器世間 (Ms 40r2, D 118r4)	磯田 (1991) が蔵文和訳 (D121v4 まで)
一切法 (Ms 48r4, D 127r1)	李・加納 (2015) が梵文校訂、Akahane and Yokoyama (2014) が蔵文校訂。本稿および次稿で梵文和訳
二諦 (Ms 58r5, D 138r1)	李・加納 (2016) が梵文校訂 磯田 (1993) が概観、Kapstein (2001) が蔵文英訳
一乗 (Ms 67v2, D 148v7)	李・加納 (2014) が梵文校訂・和訳、磯田 (1993) が概観・考察
第1章奥付 (Ms 70r4, D 151v4)	

科段

『牟尼意趣莊嚴』の一切法解説の科段は下記の通りである。太字は本稿で扱う範囲を示す。科段では見出しに続いて、『牟尼意趣莊嚴』の梵文写本 (Ms) の葉番号、蔵訳 (Tib, デルゲ版) の葉番号、および素材とされた『中観五蘊論』(MPSk) の対応箇所 (デルゲ版) を示す。

【一切法科段】 Ms 48r4–58v1, Tib 127r1–138r1

【一切法の序文】 Ms 48r4, Tib 127r1

【五蘊】 Ms 48r4, Tib 127r1, MPSk 239v2

【色蘊】 Ms 48r4, Tib 127r1, MPSk 239v6–240r3

【四大種】 Ms 49r1–3, Tib 127v4–7, MPSk 240r3–v1

【所造色】

- [五根] Ms 49r3, Tib 127v7, MPSk 240v5–241r4
 [五境] Ms 49r4, Tib 128a2, MPSk 241r7–242v2
 [色蘊の総括] Ms 49v3, Tib 128v1, MPSk —
 [受蘊] Ms 49v3, Tib 128v3, MPSk 242v3
 [定義] Ms 49v3, Tib 128v3, MPSk 242v3
 [心・心所] Ms 49v3, Tib 128v3, MPSk 242v3–5
 [受の種類] Ms 50r1, Tib 128v6, MPSk 244r1–v3
 [想蘊] Ms 50r3, Tib 129r3, MPSk 244v3–245r3
 [行蘊] Ms 50v2–57r3, Tib 129v1–136v1, MPSk 245r3–265v7
 [序] Ms 50v2–3, Tib 129v1–2, MPSk 245r3
 [心相応行の列挙] Ms 50v3–4, Tib 129v2–7, MPSk 245r6–v2
 [思] Ms 50v4, Tib 129v7–130r1, MPSk 245v5–7
 [触] Ms 50v4–51r2, Tib 130r1–4, MPSk 245v7–246r3
 [作意] Ms 51r2–3, Tib 130r4–5, MPSk 246r4–7
 [欲] Ms 51r3, Tib 130r5–6, MPSk 246v5, 247r5
 [勝解] Ms 51r3–4, Tib 130r6–7, MPSk 147v1–2
 [信、精進、念、定、慧] Ms 51r4–v1, Tib 130r7–v2, MPSk 247v2–3, 247v7–248r4
 [尋、伺] Ms 51v2 Tib 130v3–4, MPSk 254r5–6
 [放逸、不放逸] Ms 51v2, Tib 130v4–5, MPSk 255r1
 [厭] Ms 51v2, Tib 130v5, MPSk 255v1
 [欣] Ms 51v3, Tib 130v5–6, MPSk 255v2
 [軽安、不軽安] Ms 51v3, Tib 130v6, MPSk 255v2–3
 [害、不害] Ms 51v3, Tib 130v6–7, MPSk 255v4
 [慚、愧] Ms 51v3–4, Tib 130v7–131r1, MPSk 255v5–6
 [捨] Ms 51v4, Tib 131r1–2, MPSk 255v7–256r2
 [解脱] Ms 51v4–52r1, Tib 131r2–4, MPSk 256r2, 255r2–3⁽⁴⁾
 [善根] Ms 52r1–2, Tib 131r4–6, MPSk 256r3–5
 [不善根] Ms 52r2–3, Tib 131r6–v1, MPSk 256r5–7
 [無記根] Ms 52r3–v1, Tib 131v1–5, MPSk 256r7–v4, 255r3–6⁽⁵⁾
 [結] Ms 52v1–53v1, Tib 131v5–133r2, MPSk 256v4–259r3
 [縛] Ms 53v1–2, Tib 133a2–3, MPSk 259r3

⁽⁴⁾ 『牟尼意趣莊嚴』における解脱の解説の一部については、並行する解説が『中観五蘊論』の不放逸の解説に確認される。

⁽⁵⁾ 『牟尼意趣莊嚴』における無記根の解説の一部については、並行する解説が『中観五蘊論』の不放逸の解説に確認される。

[六随眠]

(総説) Ms 53v2, Tib 133r3-4, MPSk 259r3-6

(語義) Ms 53v2-3, Tib 133r4-5, MPSk 261r5-6

(順序) Ms 53v3-54r1, Tib 133r5-v1, MPSk 261r6-v4

(原因) Ms 54r1-2, Tib 133v1-3, MPSk 261v4

[随煩惱] Ms 54r2-4, Tib 133v3-7, MPSk 261v5-262r5

[纏] Ms 54r4-v3, Tib 133v7r134r6, MPSk 262r5-263r1

[漏] Ms 54v3-4, Tib 134r6-v1, MPSk 263r1-4, 263v4-5

[暴流] Ms 54v4-55r1, Tib 134v1-2, MPSk 263r4-6, 263v5

[軛] Ms 55r1, Tib 134v2-3, MPSk 263r6, 263v5-6

[取] Ms 55r1-3, Tib 134v3-5, MPSk 263r6-v3, 263v6

[繫] Ms 55r3, Tib 134v5-7, MPSk 263v6-264r2

[蓋] Ms 55r3-4, Tib 134v7-135r5, MPSk 264r2-3

[智] Ms 55v2-3, Tib 135r5-6, cf. MPSk 264r3-4

[忍] Ms 55v3, Tib 135r6, MPSk 265r3-5

[心不相応行] Ms 55v3-4, Tib 135r6-v1, MPSk

[得、非得] Ms 55v4-56r1, Tib 135v1-3, MPSk 265r5-v1

[無想定、滅尽定、無想果] Ms 56r1-2, Tib 135v3-5, MPSk 265v1-3

[命根、同分、生、老、住、無常性] Ms 56r2-3, Tib 135v5-6, MPSk 265v3-6

[名身、句身、文身] Ms 56r3, Tib 135v6-7, MPSk 265v6-7

[不和合、和合] Ms 56r3, Tib 135v7, MPSk 265v7

[大乘阿毘達磨集論の所説] Ms 56r3-57r1, Tib 135v7-136r4, MPSk

[心相応行まとめ] Ms 57r1-3, Tib 136r4-136v1, MPSk

[識蘊] Ms 57r3-v1, Tib 136v1-5, MPSk 265v7-266r5, 249v7⁽⁶⁾

[五蘊の総括] Ms 57v1, Tib 136v5-7, MPSk

[十二処] Ms 57v1-58r2, Tib 136v7-137r1, MPSk 265r7-v4

[十八界] Ms 58r2-5, Tib 137v1-7, MPSk 266v4-5

[五蘊、十二処、十八界の総括] Ms 58r5, Tib 137v7, MPSk

補足資料

[無表の解説] Ms 5r3-v2, Tib 78v3-79r3, MPSk 242v3-243r3, 243r7-v2

⁽⁶⁾ 『牟尼意趣莊嚴』における識の解説の一部については、並行する解説が『中観五蘊論』の眼根の解説に確認される。

凡例

以上に示した『牟尼意趣莊嚴』第1章における一切法解説の中から、本稿では前半部（導入部から無記根まで）の和訳を提出する。本和訳は、李・加納（2015）において発表された一切法解説の梵文に基づくものであるが、Akahane and Yokoyama（2014）において発表された当該箇所蔵文校訂本を随時参照した。特に、北京版、ナルタン版、金写版の三版に挿入される割注の中で、梵文の翻訳に資するものについては、脚注に示した。また、無表の具体的な教理内容の解説は、一切法の解説に先行する律儀戒儀軌の解説においてなされるが、他の諸法と同様に、その解説は『中観五蘊論』の解説に基づくものである。この無表の解説箇所の梵文は、李・加納（2015）において、補足資料として公開されている。したがって、本稿では、この無表の解説に関しても梵文からの和訳を製作し、梵文の場合と同じく、補足資料として本稿の末尾に付すものとする。

略号と一次文献

AK / AKBh = P. Pradhan (ed.), *Abhidharmakośabhāṣya of Vasubandhu*, Patna: K. P. Jayaswal Research Institute, 1967.

Apoḥaprakaraṇa = A. Thakul (ed.), *Jñānaśrīmitranibandhāvali*, Patna: K. P. Jayaswal Research Institute, 1959, pp. 201–232.

CŚ = K. Suzuki (ed.), Candrakīrti's *Bodhisattvayogācāracatuḥśatakaṭīkā*, Tokyo: The Sankibo Press, 1994.

MMK = 三枝充憲 (ed.), 『中論偈頌總論』: 東京、第三文明社、1985。

MPSk = *Madhyamakapañcaskandhaka*, Derge Tōhoku No. 3866.

Ms = Manuscript

Munimatālaṃkāra = X. Li and K. Kano (ed.) in 李・加納（2015）。

Pañcaskandhavivaraṇa = Derge Tōhoku No. 4067.

PP = L. de la Vallée Poussin (ed.), *Mūlamadhyamakakārikās (Mādhyamikasūtra) de Nāgārjuna avec la Prasannapadā Commentaire de Candrakīrti*, St. Pétersbourg: Académie Impériale des Sciences, 1903–13.

RĀ = M. Hahn (ed.), *Nāgārjuna's Ratnāvalī*, Bonn: Indica et Tibetica, 1982.

Sāratamā = P. S. Jaini (ed.), *Sāratamā, A Pañjikā on the Aṣṭasāhasrikā Prajñāpāramitā Sūtra*,
Patna: K. P. Jayaswal Research Insititute, 1979.

T = *Taishō Shinshū Daizōkyō* 『大正新脩大藏經』

『五事毘婆沙論』 = 『大正新脩大藏經』、28 卷、No. 1555。

『阿毘達磨順正理論』 = 『大正新脩大藏經』、29 卷、No. 1562。

二次文献

和文研究

磯田熙文

1981 「『Munimatālaṃkāra』について」、『印度学仏教学研究』29-2、885-879 頁。

1983 「『Munimatālaṃkāra』について (2)」、『印度学仏教学研究』32-1、116-121 頁。

1991 「『Munimatālaṃkāra』に説かれる有情世間・器世間」、『インド思想における人間観：東北大学印度学講座六十五周年記念論集』41、487-510 頁。

1993 「Abhayākaragupta と『Madhyamakāloka』」、『インド学密教学研究：宮坂宥勝博士古稀記念論文集・上』、法蔵館、501-516 頁。

加納和雄・李学竹

2013 「梵文『牟尼意趣莊嚴』(Munimatālaṃkāra) 第一章の和訳と校訂一冒頭部一」、『密教文化』229、37-63 頁。

横山剛

2014 「『牟尼意趣莊嚴』(Munimatālaṃkāra) における一切法の解説一月称造『中観五蘊論』との関連をめぐって一」、『密教文化』233、51-77 頁。

2015 「『中観五蘊論』における諸法解説の性格一無我説との関係をめぐって一」、『密教文化』235、近刊。

李学竹・加納和雄

2014 「梵文『牟尼意趣莊嚴』第1章末尾の校訂と和訳一『中観光明』一乗論証段の原文回収一」、『密教文化』232、2014 年、7-42 頁。

2015 「梵文校訂『牟尼意趣莊嚴』第一章 (fol. 48r4-58r5) 一『中観五蘊論』にもとづく一切法の解説一」、『密教文化』234、7-44 頁。

2016 「梵文校訂『牟尼意趣莊嚴』第一章一『中観光明』二諦説佚文一」、『密教文化』236、近刊。

欧文研究

Akahane, Ritsu and Yokoyama, Takeshi

- 2014 The Sarvadharmā Section of the *Munimatālaṃkāra*, Critical Tibetan Text, Part I: with Special Reference to Candrakīrti's *Madhyamakapañcaskandhaka*. *Journal of Indian and Tibetan Studies* インド学チベット学研究 18, pp. 14–49.

Kapstein, Matthew

- 2001 Abhayākaraḡupta on Two Truths. In: Kapstein, *Reason's Traces*, Boston: Wisdom Publications, pp. 393–415.

MacCrea, Lawrence J. and Patil, Parimal G.

- 2010 *Buddhist Philosophy of Language in India: Jñānaśrīmitra on Exclusion*, New York: Columbia University Press.

Yokoyama, Takeshi

- 2015 A Reconstruction of the Sanskrit Title of Candrakīrti's *Phuñ po lña'i rab tu byed pa*: with Special Attention to the Term "rab tu byed pa". *Journal of Indian and Buddhist Studies* 印度學佛教學研究 63-3, pp. 208–212.

- 2016 An Analysis of the Textual Purpose of the *Madhyamakapañcaskandhaka*: With a Focus on its Role as a Primer on Abhidharma Categories for Buddhist Beginners. *Journal of Indian and Buddhist Studies* 印度學佛教學研究 64-3, forthcoming.

和訳

[一切法の序文]

そしてこの三界は、〔上記のように⁽⁷⁾〕有情世間と器世間の区分によって二種でもあり、〔下記のように〕蘊処界を本質とする。

[五蘊]

その中で、蘊には五つある⁽⁸⁾。色受想行識である。

[色蘊]

その中で、眼耳鼻舌身という根と、色声香味触という境、以上の十が色蘊である。他派の者は、

⁽⁷⁾ 磯田 1991b を参照。

⁽⁸⁾ 割注「五蘊などの以下の体系は、チャンドラキールティ先生が『中観五蘊論』に説いた通りに〔以下の一節をアバヤーカラグプタが〕御著作なさった」。

無表 (avijñapti) も〔色蘊に含まれる〕という⁽⁹⁾。

[四大種と大種所造]

そして、それ(十の色蘊)は二種からなる。大種と大種所造である。その中で、四大種とは⁽¹⁰⁾、地水火風界であり、所触に包括される。一方、〔その他の〕残りの所触は、滑らかさなどである⁽¹¹⁾。

眼などの十は、大種所造に他ならない。大種の上に存在するからである。たとえば草や木材などに依って (upādāya) 家屋があり、薪木に依って火があるように、大種に依拠して眼などのものが生じるので、所造色 (upādāyarūpam) といわれる。

まさにこれゆえに、鏡像 (映し姿) のように諸大種が無自性であるとき、それ (諸大種) を因とする眼や色などの所造〔色も〕無自性であるということは、容易に理解できる⁽¹²⁾。

さらに、欲界において、根を除いた極微は⁽¹³⁾、八つの実体 (dravya) からなるものとして生じる。その場合、八つの実体とは、すなわち四大種および色、香、味、所触である。〔その極微が〕内的な身根を含む場合、九つの実体からなる。〔さらにその極微が〕もうひとつ根 (眼鼻舌身のうちのいずれか一つの根) を持つ場合、〔つまり〕眼などの諸根を伴う場合、十の実体からなる。さらに、それらの極微は、声を含む場合には、九、十、十一の実体からなるものとして生じる⁽¹⁴⁾。

その中で、極微が八つの実体からなる場合、それら八つの実体は、石榴の種のように、各々別々に独自に存立するわけではない。そうではなく、飲料 (pānaka) などの中において、棗 (kola)、クラッタ豆 (kulattha)、糖蜜 (guḍa)、タマリンド (tintīdikā) などの〔混ざった〕味のように⁽¹⁵⁾、〔八つの実体は〕混在したものとして存立する。またその場合には、極微において個々の〔実体は、それ以外の〕それぞれ七つの実体を離れては成立しないから、〔実体が〕自体として成立することはない。〔それら実体は〕相互に依存して生じるからである⁽¹⁶⁾。

そして〔それら実体は、世俗としては⁽¹⁷⁾〕全く存在しないわけではない。個々〔の実体〕は、

⁽⁹⁾ 有部も無表を色蘊に含めて 11 とするので、ここでいう「他派の者」とは有部を指すと考えられる。また『中観五蘊論』も有部の説に従う。

⁽¹⁰⁾ 割注「特殊な共業と不共業から生じる」。

⁽¹¹⁾ 所触は全部で 11 あり、4 つの大種のほかに 7 つあるといわれる。詳しくは下記〔五境〕の「所触」の項を参照。

⁽¹²⁾ 割注は『四百論』を引用する。CSĪ, p. 340, ll. 9–10: rūpādīvyatirekeṇa yathā kumbho na vidyate / vāyvādīvyatirekeṇa tathā rūpaṃ na vidyate // XIV. 15 「色などは別に壺があるわけではない。同様に、風などと別に色があるわけではない。『明句論』などにも引用される (PP, p. 71, ll. 1–2)。

⁽¹³⁾ 「極微」(paramāṇur) という語は『中観五蘊論』にはなく (直前の文に出る D 250v2)、アバヤーカラグプタが補ったものである。

⁽¹⁴⁾ AKBh, p. 52, l. 20–p. 53, l. 8.

⁽¹⁵⁾ 『中観五蘊論』(D 250v5) では、薬膳野菜煮 (sman gyi tshod ma) の中では棗とクラッタ豆が、飲料 (pānaka、固有名詞か) の中では糖蜜とタマリンドが混じり合っていると解説される。

⁽¹⁶⁾ 割注は『中論』を引用する。MMK, p. 404, l. 3: akr̥trimah̥ svabhāvo hi nirapekṣaḥ paratra ca // XV. 2cd

⁽¹⁷⁾ 「世俗としては」は割注により補う。

〔それ以外の〕それぞれ七つの実体に依拠して認識されるからである。そしてこの理屈は、極微が十と十一の実体をもつ場合にもまた知られるべきである。それゆえ (tat)、以上のように、諸根と諸境は鏡像の如くである⁽¹⁸⁾。

そこから⁽¹⁹⁾心と心所が生じ、〔それもまた鏡像の如くである〕。〔心と心所は〕鏡像の如き拠り所(根)と認識対象(境)とから生じるからである。

さらに、相互に依存して生じるから、大種は本性として成立するものではない。同様に、相互の能力に依拠して成立するから、心と心所も本性としては成立せず、鏡像の如きものの域を出ない。同じ様に、〔心と心所には〕特徴づけられる対象と特徴〔という関係〕もまた適用されるべきである⁽²⁰⁾。

〔四大種の定義〕

その〔四大種の〕中で地とは、堅さ、丈夫さ、堅牢さであり、〔状態を〕保持する働きをもつ。水界とは、流動性と潤い⁽²¹⁾であり、包摂する働きをもつ。火とは、暖かさであり、熟成(pakti)⁽²²⁾と乾燥の働きをもつ。風とは、軽さと動きであり、増大と前進の働きをもつ。この中で増大(vṛddhi)とは、追加の部分を生み出すことである。

そして、それら大種のうちのひとつがある場合には、残りのもの(他の大種)もある⁽²³⁾。というのは、地という実体をもつ石などにおいては、包摂などの働きがみられるから、水火風の存在が推測される。水においては、船を支えたり温めたり引いたりする〔働き〕がみられるから、地火風の〔存在が推測される〕。燃え盛る炎においては、安定と集約と揺れの〔働き〕がみられるから、地水風の〔存在が推測される〕。風においては、保持および寒暖の接触があるから、地水火の〔存在が推測される〕⁽²⁴⁾。

⁽¹⁸⁾ 割注は「自性はないが顕現する」と補う。

⁽¹⁹⁾ 割注「つまり眼などの根に依拠し、色などの境を対象として」。

⁽²⁰⁾ 割注「相互に依存しないので本性として成立せず」に。本性が写し姿のようなものなので、その性質もまた映し姿のようなものであるという意か。

⁽²¹⁾ 割注「融解」(zhu ba)。

⁽²²⁾ 割注「煮る」。

⁽²³⁾ 割注は『ラトナーヴァリー』を引用する。RĀ, p. 34, ll. 13–20: sa chu me dang rlung rnam ni // re re'ang ngo bo nyid du med // gang gsum med par re re med // gcig med par yang gsum med do // I. 84 gal te gsum med re re med // gcig med par yang gsum med na // so sor yod pa ma yin te // ji ltar 'dus pa skyed par 'gyur // I. 85 「地水火風はそれぞれ実体的には存在しない。三者なくして各一つずつは存在せず、また各一つずつなくしても他の三者は存在しない。もし三者なくして一がなく、一なくして三がないのならば、それぞれ個別に存在することはなく、どうして集合がありえようか」。

⁽²⁴⁾ Guṇaprabha, *Pañcaskandhavarāṇa*, D 5r1–3: ji lta zhe na shing dang / rdo la sogs pa la sdud pa dang / me 'byung ba dang / 'phel ba dang / ltung ba yod pas chu (D5r2) dang me dang rlung dang ldan par mngon no // chu la yang gru 'dzin pa dang / dro ba dang / g-yo ba dmigs pas sa dang me dang rlung dang ldan par mngon no // me lce la yang 'degs pa dang / sdud pa dang g-yo ba dmigs pas sa dang chu dang / rlung dang ldan par mngon no // rlung la yang (D5r3) 'degs pa dang / grang ba dang tsha ba'i reg pa dmigs pas sa dang chu dang me dang ldan par mngon no // 割注は『ラトナーヴァリー』を引用する。RĀ, p. 35, ll. 3–4: g-yo dang thogs dang sdud pa dang // chu dang rlung dang sa de bzhin // I. 86cd 「流動、維持、包括と水、風、火もまた同様である」。

虚空には大性 (mahattva) があるけれど、大種性 (bhūtatva) はない。〔大種とは違って虚空は〕無為なので、〔大種の生起をもたらすような〕特殊な共業と不共業から生じることがないからである。だから、虚空は大種ではない。

[所造色]

[五根]

眼根⁽²⁵⁾は、眼球内の瞳孔の中にあり、見え⁽²⁶⁾、葡萄の実ほどの大きさで、クミンの花のようなものとして存在し、透明な被膜に覆われている。耳根は、樺の⁽²⁷⁾節のようなものとして、耳の内側にある。鼻根は鼻の内側に、眼膏の棒のようなものとしてある (añjanaśalākāvat)⁽²⁸⁾。舌根は半月の形状で存在する。身根は、身体の形状で存在する⁽²⁹⁾。それら五つは、自らの対象を認識することに関して力を発揮するもの (ādhipatya)⁽³⁰⁾であるから、根である⁽³¹⁾。

[五境]

色処は、色彩と形状との二種である。色彩とは、青、黄、赤、白、雲、煙、塵、霧⁽³²⁾、影、日光 (ātapa)⁽³³⁾、明かり (āloka)、闇である。形状とは、長、短、方形、円形、凸、凹、整った形、歪な形である⁽³⁴⁾。日光とは太陽の輝きであり、明かりとは月、星、炎、葉草、宝珠の輝きである。

声〔処〕は⁽³⁵⁾、感覚的 (執受)⁽³⁶⁾、無感覚的 (無執受)⁽³⁷⁾、および両者⁽³⁸⁾からなる大種を原因として持つものである。感覚的とは、心を有するものである⁽³⁹⁾。無感覚的とは⁽⁴⁰⁾、爪や髪などであり、切断されても痛みがないものである。

香〔処〕については自明である⁽⁴¹⁾。

味〔処〕は六種である。甘味、酸味、塩味、辛味、苦味、渋味の区別による。

所触は十一種である。つまり、四大種、滑らかさ (すべすべ)、粗さ (ざらざら)、重さ、軽

⁽²⁵⁾ 割注「眼識の基盤」。

⁽²⁶⁾ 割注「通常的眼では」。

⁽²⁷⁾ 割注「の結び目または」。

⁽²⁸⁾ 『中観五蘊論』(D 241r2-3) はやや詳しい。「鼻根の極微は、鼻腔 (mtshul pa) 中の骨 (itag khung) の上面に眼膏の棒 (mig snam gyi thar ma) を並べたように存在し」。

⁽²⁹⁾ AKBh, p. 33, ll. 14-20.

⁽³⁰⁾ 割注「または主人」。

⁽³¹⁾ AKBh, p. 38, ll. 3-4.

⁽³²⁾ 割注「水蒸気」。

⁽³³⁾ 割注「〔日光があれば、他の〕光が無くてもそこに色が現れる」。

⁽³⁴⁾ 割注「高低を伴って存在するもの」。

⁽³⁵⁾ 割注「耳識の把握対象であり、〔その認識は〕風と心による」。

⁽³⁶⁾ 割注「説法の声の如し」。

⁽³⁷⁾ 割注「〔無感覚的〕なる因をもつ風の音の如し」。

⁽³⁸⁾ 割注「手で太鼓を叩く音のようなもの」。

⁽³⁹⁾ 割注「心と心所が生じる場所の色」。

⁽⁴⁰⁾ 割注「あらゆる非情の色と」。

⁽⁴¹⁾ 割注「芳香と異臭と等香 (どちらでもない匂い)」。

さ、冷たさ、空腹感、渇きである。腹の中で身根によって触れられるものが⁽⁴²⁾空腹感であり、食事を欲せしめるものである。渇きとは、飲み物を欲せしめるものである。原因⁽⁴³⁾（のどが渇いた感覚）に対して結果（飲みたいという欲望）でもって比喩的に表現していることによる。〔四大種全体の均衡において〕水界と火界とが突出した大種が集まった時に滑らかさ⁽⁴⁴⁾がある。地と風が突出した時に粗さ⁽⁴⁵⁾がある。地と水が突出した時に重さがある。そして火と風が突出した時に軽さがある。水と風が突出した時に冷たさがある。風が突出した時に空腹感がある。火と風が突出した時に渇きがある⁽⁴⁶⁾。以上が五根の境である。

その中で、眼〔根〕などの五つは⁽⁴⁷⁾、各自の識の集まり（識身）〔の存在〕から推測されるものなので、〔直接的には〕意識によってのみ認識されるものである⁽⁴⁸⁾。しかし、色などの五つ（五境）は、眼などの五つの識⁽⁴⁹⁾によって認識される。

[無表]

一方、無表が実在するもの（vastusati）ではないことは、すでに先に明かした。

[色蘊の総括]

したがって、件の十（五根と五境）は、壊され（rūpyante）、損なわれ、害される。つまり、ある（色の存在）が別の（色の存在）に対して〔壊され、損なわれ、害される〕のだから諸色は抵抗性をもつ⁽⁵⁰⁾。それら（色）の集まり（rāsi）が色蘊と呼ばれる。

[受蘊]

[定義]

安楽をもたらす対象、苦痛をもたらす対象、その両者を離れた対象の本質を直感することで、〔それらの〕対象を経験すること（anubhūti）、〔対象についての〕識を経験すること（anubhava）、感受（vitti）することが、受（vedanā）と言われる。

[心と心所の関係]

毘婆娑師たちは〔次のように〕言う。

⁽⁴²⁾ 割注「空腹感と渇きをもたらすので」。

⁽⁴³⁾ 割注「腹の中の所触」。

⁽⁴⁴⁾ 割注「触れたら心地よい」。

⁽⁴⁵⁾ 割注「ざらざら感」（rud rud po）。

⁽⁴⁶⁾ 『五事毘婆娑論』 T, vol. 28, 992b28–c3: 復有説者。水火界増故能造滑。地風界増故能造澁。火風界増故能造輕。地水界増故能造重。水風界増故能造冷。唯風界増故能造飢。唯火界増故能造渴。『阿毘達磨順正理論』 T, vol. 29, 335a5–14: 何縁滑等展轉差別。所依大種増微別故。水火界増故生滑性。地風界増故生澁性。地水界増故生重性。火風界増故生輕性。故死身内重性偏増。水風界増故生於冷。… 風界増故生飢。火界増故生渴。

⁽⁴⁷⁾ 割注「根の対象を超越しているから」。

⁽⁴⁸⁾ 割注「『俱舍論』には「二種の識〔ひとつの根識と意識〕に認識されるので五〔境はある〕」（AK, I. 48a: pañca bāhyā dvivijñeyāḥ）と説かれるように」。

⁽⁴⁹⁾ 割注「意識と」。

⁽⁵⁰⁾ すなわち、あるひとつの色が現れている時に別の色は現れないという意。AKBh, p. 9, ll. 10–17 を参照。

その場合、心が主であり、心所はそうではない。なぜなら、それら⁶⁰⁾は、心に属するもの⁶²⁾、あるいは心における所産 (bhava) であり、心の振る舞いを本質とするものであり、別々に⁶³⁾成り立つからである。しかし、法を分析するときには、[心ではなくて] 慧が、心所の束に対しても、王の如く振る舞う (rājate)。場合場合によって、ある法が主となる。たとえば、確信するときには信 [の心所] などがあるように⁶⁴⁾。五蘊からなる束は、無漏である⁶⁵⁾。

瑜伽行派たちは次のように言う。

心所とは、心の振る舞いを本質としていて、心の特殊な状態であり、心とは別のものではない。

中観派たちは次のように言う。

世俗としては、吟味しない限り好ましいものである⁶⁶⁾、たとえば、ある場合には [心と心所が] 同一であり、またある場合には、[心と心所が] 別であると表現される。しかし勝義としては⁶⁷⁾、[心と心所が] 同一とか別とかいうことは不合理である。

[受の種類]

そして、かかる受は、身体に関するものと (身受)、心に関するもの (心受) とがある。さらに三種ある。楽、苦、不苦不楽である。さらに五種ある。楽根、苦根、喜根、憂根、捨根である。その中で楽根とは、有色根に依拠した識と結びついた [受] と、第三禪にありかつ心的な快なる受である⁶⁸⁾。苦根とは、有色根 [に依拠した] 識と結びついた不快なる受である。喜根とは、意識と結びついた快として感受されたもの (vedita) である。憂根とは、同じ心的なもので、不快なものとして [感受されたものである]。他方、捨根とは、[心と身に関する] すべてのものであり、快でもなく不快でもないものとして感受されたものである。というのも⁶⁹⁾、心的な苦楽は、主として、分別から生じるが、身体的な [苦楽] は、[分別から生じ] ない (つまり身心の捨根とも分別からは生じない)。対象の力に応じて、[分別のない] 阿羅漢にも [身

⁶⁰⁾ 割注「心所」。

⁶²⁾ 割注「または主ではない」。

⁶³⁾ 割注「心とは [別々に]」。

⁶⁴⁾ 割注「[或いは] 熟達したことについて忘れない (北京版の rjed を brjed に訂正) 時に念 [があるように]」。

⁶⁵⁾ ただしチベット訳は、dper na mngon par (D128v5) yid ches pa'i dus na dad pa la sogs pa zag pa med pa'i phung po lnga'i tshogs pa lta bu'o zhes so とある。

⁶⁶⁾ 割注「吟味に耐えない」。

⁶⁷⁾ 割注「心所は実体としては存在しないので」。

⁶⁸⁾ 割注「[第三禪には] 五識身がないので身受がなく」、「[心的な、すなわち] 識と相応する」、「[快い受とは] 利益をなすこと」。

⁶⁹⁾ 割注「身心の二つの捨根を一つにするのはなぜかという」。

体的苦楽は] 生じるからである⁶⁰。さらに〔受〕六種である。眼との接触により生じる受、乃至、意との接触により生じる受である。以上、受蘊が述べられた。

[想蘊]

さて、壺や布といった色をはじめとする諸々の有為は、〔それらが〕有為である点では共通するものの、個別的には、諸々の因と縁とに特殊性（または差異 *viśeṣa*）がある。そして、その特殊性に基づいて、〔有為法において〕相互に、〔壺の特徴である〕幅広の底を持つなどといった特殊性がある。そして、まさしくその特殊性が、特徴 (*nimitta*) と呼ばれる。なぜなら、それ（特徴）によって諸々の対象が〔各自の〕特殊性に準じて推察されるからである。壺性などのその特徴を捉えて、想い描き⁶¹、判断する心所法が、想と呼ばれる。〔そしてそれは〕特徴の把握を本質とする。これについて毘婆娑師たちは次のように言う⁶²。

想は、不相応〔行〕としての名 (*nāman*) を伴って、単一の対象に対して生起する。そして名が対象を顕し出し、想が〔その対象を〕想い描く⁶³。なお、明瞭なそれ（想）は、名と特徴と対象⁶⁴との協約関係についての知をそなえている。というのは、彼ら（人々）は、言葉にもとづいて名を確定し、そして名にもとづいて対象を〔確定する〕からである。まさにこのために、語は名において機能し、名は対象を顕し出す。ところが、言語慣習 (*vyavahāra*) に通じていない人は、不明瞭 (*apātu*) な想を伴っていて、名称と対象とを理解しない。また、〔その人は他者に〕名と対象とを理解させることがない。

そしてそのことは、別の箇所ですでに吟味され終わっている。他方⁶⁵、次の言明は〔観点こそ異なるが〕理に適っている。

〔形象（イメージ）が〕語と結合することは、外界であれ、心内であれ、どこにもない。それにも関わらず、ものの形象 (*ākṛti*) の微片は、ことばの形象を伴って、〔心内に〕拡がり顕れる。また、同じ知自身の判断⁶⁶が、外界とことばとの上に、その〔同一の心〕自体に依拠した虚偽なる二者（ものの形象とことばの形象）を、提供する (*nidhatte*)。

⁶⁰ 割注「身心の捨は、分別なくして自らの本性 (*rang gi ngang*) によって生じるので、根とされる」。AKBh, p. 41, l. 5-p. 42, l. 5.

⁶¹ *saṃjānānam*が中性形をとる点については要検討。udgrahaṇaに対応している。

⁶² 『中観五蘊論』ではこれと類似した文章が地の文に現れるが、これをアバヤーカラグプタが毘婆娑師に仮託している根拠は不明。

⁶³ 『中観五蘊論』(‘*du shes kyis ni yang dag par shes par byed de*) に従って、*saṃjñā jānāti* を *saṃjñā saṃjānāti* と訂正する。

⁶⁴ 壺という「名」、膨らみという壺の「特徴」、壺という「対象」のこと。

⁶⁵ 「他方」(*tu*) の意味するところは、上記に、想が「協約関係についての知をもつもの」と述べたことに対して、別の観点から、下記引用のように、想（判断 *adhyavasiti*）が分別を発生させるという説明もあると並置している点にある。

⁶⁶ 「同じ知自体の判断」(*dhiya evādhivasitir*)。この場合の「知」は心 (*citta*) に相当し、その「判断」とは「想」に相当すると考えられるか。

そのことにより (ataḥ)、分別の設定が〔なされる〕⁶⁷⁾。

[六種の想]

そして、かの想には六種ある。眼識と結びついたもの、乃至、意識と結びついたものである。以上、想蘊。

[行蘊]

行蘊は心所である(つまり心所の一部である)。しかし、そこ(心所)から取り出して、受と想とが別々に二つの蘊とされる。〔受と想〕論争の根源であり⁶⁸⁾、また輪廻の原因であるからである。論争の根源には実に二種ある。欲への執着と、見への執着とである。その両者にとって、受と想とが、順次、主要な原因となっている。またその両者(受と想)は輪廻にとっても原因となっている。というのは、受に耽溺して、顛倒した想を持つ者が、輪廻するからである⁶⁹⁾。

[心相応行の列挙]

それら(受と想)以外〔の心所、つまり行蘊〕は、思(cetanā)、触(sparśa)、作意(manaskāra)、欲(chanda)、勝解(adhimokṣa)、信(śraddhā)、精進(vīrya)、念(smṛti)、定(samādhi)、慧(prajñā)、尋(vitarka)、伺(vicāra)、放逸(pramāda)、不放逸(apramāda)⁷⁰⁾、厭(nirvit)、欣(prāmodya)、軽安(prasrabdhi)、不軽安(aprasrabdhi)、害(vihimsā)、不害(avihimsā)、慚(hrī)、愧(apatrāpā)、捨(upekṣā)、解脱(vimukti)、善根(kuśalamūla)、不善根(akuśalamūla)、無記根(avyākṛtamūla)、結(saṃyojana)、縛(bandhana)、隨眠(anuśaya)、隨煩惱(upakleśa)、纏(paryavasthāna)、漏(āsrava)、暴流(ogha)、軛(yoga)、(upādāna)、繫(grantha)、蓋(vāraṇa)、智(jñāna)、忍(kṣānti)である。以上、行〔蘊〕。

[思]

その中で、思とは、心の発動(abhisamkāra)であり、意の働き(意思作用)である。心が作用を伴うようになることによって、〔思は〕あれこれのものに対して生じるのであって、行為

⁶⁷⁾ Jñānaśrīmitra, *Apoḥaprakaraṇa*, p. 227, ll. 5–9 所出。Cf. MacCrea and Patil (2010), p. 90: "And therefore I say, there is no connection with words anywhere, either externally or in one's awareness, but a little bit of the image of the thing appears mixed up with the image of the speech sounds, And it is because the determination of the awareness itself invests both of these aspects in the external object and in the verbal expression that conceptual awareness is established."

なお、同書において引用の直前では次のように述べられている。*Apoḥaprakaraṇa*, p. 227, ll. 3–4: tasmād yāvād arthagrahaṇābhīmānavān mānavāḥ tāvad abhidhānasaṃyuktagrahaṇābhīmānavān apīty avasāyānurodhād eva vikalpavyavasthā na tattvataḥ 「それゆえ人は、対象を把握していると思い込んでいる限り、言語表現と結びつけて把握していると思い込んでいる。だから、ほかならぬ判断に頓着することによって、分別の設定があるのであって、〔分別の設定は〕事実在即してあるのではない」。

⁶⁸⁾ 例えば、*Suttanipāta* の *Aṭṭhakavagga* に含まれる *Kalahavivādasutta* では、想が論争の根源とされている。

⁶⁹⁾ *AKBh*, p. 14, ll. 14–21.

⁷⁰⁾ チベットは「不放逸」「放逸」(bag yod pa dang bag med pa)とあり、順が逆になっている。

を本質とする。そしてそれには、善、不善、無記という三種がある。さらに〔それは〕眼識などと結びつくので六種となる。

[触]

触とは、母、父、息子に〔それぞれ〕相当する、根、境、識の和合である。根、境、識の和合が存在するときに、単なる類似によって、楽などの受の生起に随順した根の変化を確定するその心所を、触と呼ぶ。〔そして触は〕楽などの受を生み出す。〔根、境、識の〕類似によって根の変化に触れるから〔触というの〕である。それゆえ、根の区別により、眼との接触、乃至、意との接触にいたるまで〔六種の触〕がある。そして、アビダルマには次のように言われる。

触は、三者（根、境、識）の和合のことであり、根の変化を確定し、受の生起に抛り所を提供する働きをもつ⁷⁾、

と。和合というのは、因果関係として措定された三者（根、境、識）の相互の接触のことである。

[作意]

作意とは、心を対象 (viṣaya) に差し向けること (samanvāhāra) であり、対象に注意を払うこと (sāvadhānatā) という意味である。〔作意と定 (samādhi) との違いについていうと、〕定とは、散乱 (心の乱れ) に対立する法であり、〔心〕相続を単一の所縁に向けるための因である。一方、作意は、その刹那に、対象から心を散乱させないようにするものである。

[欲]

欲とは、識が〔何かを〕しようと欲することである。〔渴愛と欲との違いについていうと、〕例えば、樹脂 (jatudravya) は熱した樹皮を離れなくするための原因であるように、渴愛 (tṛṣṇā) は、心を対象に膠着させる〔因であり、輪廻に〕沈みこむ因である。一方、欲は、為すべきことに向けられた純粋な意向である。だから欲は渴愛から区別される。

[勝解]

勝解 (adhimokṣa) とは、例えば蛾が火に対してするように、心が自身の対象に対して自分自身を委ねること (mokṣaṇa)、それが没頭すること (adhimukti) である。〔作意と勝解との違いについていうと、〕作意とは、対象に関する、心における働きである。その場合 (作意の場合) は意が主題であるが、この場合 (勝解の場合) は対象が〔主題〕である。

[信]

信とは、諦と三宝と業果における実在性、有徳性、実現可能性を確信することである。一方、

⁷⁾ Cf. Ratnākaraśānti, *Sāratamā*, p. 25, ll. 18–19: uktaṃ cābhidharme trikasannipāte indriyavikāraparicchedaḥ sparśaḥ vedanotpattisanniśrayādānakarmaka iti.

区別するなら、実在性に対する確信 (abhisampratyaya) を形とする信、有徳性に対する明朗さ (prasāda) を形とする〔信〕、実現可能性に対して「私は獲得、或いは、完成することができる」という意欲を形とする〔信とがある〕。〔ここでいう諦とは〕苦を初めとする四諦、或いは、世俗諦と勝義諦という二つである。

[精進]

精進とは、善に向けて励むことである。

[念]

既に為された行為、これから為す行為、現に為している行為を心が忘れないことであり、心が銘記すること (abhilapana)、それが念である。

[定]

定とは、心の一点集中 (ekāgratā) である⁷²⁾。点 (agra) とは、所縁のことである。

[慧]

慧とは、諸法を深く分析すること (pravicaya) であり、疑念 (saṃśaya) を排除する働きをもつ。人と法と (pudgaladharmā) を本体とするもの (bhāva) を、各自の知 (buddhi) によって部分に分けたうえで、〔そのものの〕本体 (svarūpa) を考究することである。〔そして〕人と諸法との本体を観察するならば、〔それらは〕無自性であるから、何も認識しない。

[尋、伺]

それと結びつくことによって識が壺の単なる長さや美しさのような粗大な所縁を識別するその〔心所法〕、それが尋であり、把捉 (saṃkalpa) と呼ばれる。壺が老朽している、だとか堅い、だとかいった微細な観察として生じた心所法が伺である。

[放逸、不放逸]

放逸とは、善法を修めないこと、つまり専念しないことである。その逆が不放逸である。

[厭]

それと結びつくことで、輪廻の過失をみるゆえに、心が輪廻から厭離するその〔心所〕法、それが厭であり、雑染の排除に随順するものであり、厭離 (saṃvega) である。

[欣]

欣とは、〔仏教的な〕心の喜び、心の歓喜であり、〔一般的に〕喜び (saumanasya) とは別のもの

⁷²⁾ 割注「心相續をひとつの対象に確定させること」。

のである。

[軽安、不軽安]

軽安とは、身心の軽やかさのことである。不軽安とは、身心の重さであり、沈と睡眠を本質とする。

[害、不害]

その法と結びつくことで、怒りに端を発する平手打ちなどによって、他者を傷つける〔心所法〕、それが害である。不害とは、それとは逆の法である。

[慚、愧]

その力により、自分自身〔の家柄など〕ならびに〔自分の修めてきた後天的な〕徳目⁽⁷³⁾を指標として、諸罪を抑止する〔心所法〕、それが慚である。それは諸罪を生起させない原因としての法であり、恥と呼ばれる。愧とは、他人を顧みて罪を恥じる〔心所法〕である。

[捨]

それによって心が対象に対して〔愛憎を離れて〕均等に働く〔心所〕法、それが捨である。それは〔愛憎を離れた〕心の平等性である。というのは、それ（捨）によって心が〔対象に〕愛着することもなければ、攻撃することもないからである。そして阿羅漢たちのそれ（捨）は、智に随順した、扱（pratisaṃkhyā）による捨である。いっぽう凡夫たちの捨は、智に随順しない、扱によらない捨である。

[解脱]

解脱とは、心が垢れを離れた状態である。煩惱などが排除されたときに、解脱一すなわち涅槃一という名の心所法が生じる。〔以下で述べる〕中で、善（kuśala）とは安穩（kṣema）の意味である。そして解脱（つまり滅諦）とは、あらゆる災厄の停止を本質とするので、絶対的に善である。無病のように⁽⁷⁴⁾。一方で、道諦はそれ（解脱）を得る原因であるので、善である。他方、それ以外の二諦（苦諦と集諦）は有漏である。なぜなら〔苦諦と集諦は、凡夫にとって〕望ましい異熟をもたらすゆえに、〔現世の自分と〕類似した似姿を〔来世に〕生じさせるからである。

[善根]

善根は三種である。無貪（alobha）、無瞋（adveṣa）、無痴（amoha）である。その中で、無貪とは、渴愛に敵対する法であり、対象に執着しないことを定義とする。無瞋とは、敵愾心（pratigha）に対立する法であり、衆生たちに対して荒々しさが無いことを定義とする。無痴と

⁽⁷³⁾ 割注「論理と学習と戒律など」。

⁽⁷⁴⁾ AKBh, p. 202, ll. 5-8. 『中観五蘊論』の不放逸の解説にこれと並行する解説が見られる（255r2-3）。

は、無明に対立する法であり、智慧を本質とする。それらは自ずから善であり、他の諸善にとっての根本であり、樹木の根っこの如く、生起、存続、成長の原因である。

[不善根]

三種の不善根はそれと反対である。貪 (lobha)、瞋 (dveṣa)、痴 (moha) である。その中で、貪という不善根は、欲界に属するすべての貪欲 (rāga) である。そして、[瞋という不善根は]、すべての瞋である。痴という不善根は、有身見と辺執見に結び付いた痴を除外した⁷⁶⁾、欲界所属のすべての無明である。

[無記根]

無記根は三種、すなわち渴愛 (trṣṇā)、無明 (avidyā)、知 (matī) である。その中で、欲界所属の、有身見と辺執見とおよびそれら (二つの見) に結び付いた痴を除外した全ての煩惱と随煩惱とが、不善である。[それら煩惱と随煩惱は] 望ましからざる異熟をもたらすから [不善] である。そして色界および無色界所属のすべての煩惱と随煩惱、ならびに欲界における有身見などの三者⁷⁷⁾すべて、これらが無記である。その中で、およそ全ての、無記なる渴愛、無明、慧 (prajñā) が、無記根である。自ずから無記であるからであり、他の無記なる [諸法] にとっての根となるから [無記という]。堅固でないから、かつ [慢は下に向かって伸びる根っことは違って] 上に向かって働くから⁷⁸⁾、根とは異なるのであり、それゆえにその他の無記は、根ではない。またアビダルマに説かれた。

三善根と慚と愧とは、本性として善である一ちょうど良薬のように。他の諸法は、二者 (慚愧) と結びつくことによって、善となる一ちょうど薬草と混ざった飲料のように。それら (善法) によって等起させられるので、心業と語業とおよび、毘婆娑師に認められる得などの心不相応行とは、善である一ちょうど薬草と混ざった飲料から生じた汁 (kṣīra) のように⁷⁹⁾、

と。

【補足資料】 無表解説箇所の梵文和訳

[無表の解説]

⁷⁶⁾ 『牟尼意趣莊嚴』の当該梵文は satkāyāntagrāhadṛṣṭisamprayuktamohavarjā とあり、tatsamprayukta の解釈に疑問が残るが、『俱舍論』の「随眠品」における不善根の解説箇所 satkāyāntagrāhadṛṣṭisamprayuktād (AKBh, p. 291, l. 5) を参照して、上記のように訳した。

⁷⁷⁾ 三者とは、有身見、辺執見、この二見を随伴した無明を指す。AK, V. 19 を参照。

⁷⁸⁾ AK, V. 21a.

⁷⁹⁾ AKBh, p. 202, ll. 9–17. 『中観五蘊論』の不放逸の解説にこれと並行する解説が見られる (255r3–6)。

[無表の実在性について]

無表⁷⁹⁾とよばれる、単独の実体⁸⁰⁾としての法（つまり実体としての律儀など）は、何ら存在しない。無表とは、誓い⁸¹⁾を立ててから単に〔殺生などを〕行わないこと（akaraṇa）に過ぎないからである。そして、行わないことは、行為の否定であり、そしてそれ（行為の否定）は⁸²⁾何らかのもの（実体）ではない。なぜなら、〔行為の否定というのは、〕過去の諸大種に依拠して仮に設定されたものである（prajñapti）からであり、そしてそれら（過去の大種）は存在しないからである。ということで、〔無表は〕事物ではない。一方、毘婆娑師は言う⁸³⁾。

[無表の定義]

法処に含まれ、見えず、抵抗が無く、意識だけによって認識され、律儀、不律儀、中間のもの（つまり非律儀非不律儀⁸⁴⁾に関して、〔各自〕善、不善、両者（善かつ不善）⁸⁵⁾なる流れを本質とする色が無表である。

[静慮律儀と無漏律儀]

そこにおいて、ある〔無表〕色は心に随順する⁸⁶⁾。たとえば、静慮律儀と無漏律儀を本性とする〔無表色〕は、〔順次〕有漏と無漏なる禅定の心を得ることによって得られる。その心〔二種の禅定心〕を捨てることによって、〔静慮律儀と無漏律儀を〕捨てるように⁸⁷⁾。

[別解脱律儀]

ある〔無表色〕は、他者に（或いは、他者が）〔戒律条項などを〕知らせること（vijñāpana）などによって生じる⁸⁸⁾。たとえば、別解脱律儀を本質とするもののように。

[表と無表]

その中で身表とは、それ（身体の形）を所縁とする思（cetanā）から生じたものであり、身体のあれやこれやの特殊な形（状態）である。また語表とは、それ（ことばの音）を所縁とする思から生じたものであり、言葉（vaktavya）を明瞭に発話することである。

⁷⁹⁾ 割注「『俱舍論釈』では「経量部たちが言う」〔とある〕、「律儀などを本質とする」。

⁸⁰⁾ 割注「実在として成立する〔事物〕」。

⁸¹⁾ 割注「為さないとある〔誓い〕」。

⁸²⁾ 割注「絶対否定ゆえに事物としては存在しないので」。

⁸³⁾ 割注「これらは『中観五蘊論』に〔ある〕」。

⁸⁴⁾ AK, IV, 26cd.

⁸⁵⁾ 「両者」は『中観五蘊論』に欠。

⁸⁶⁾ 割注「『俱舍論』には「心所と二種の律儀と心とそれらの相は心に随順する」といい、「終わりの二つは心に随順する」というので」（AK, II, 51abc; IV, 17）。

⁸⁷⁾ 『牟尼意趣莊嚴』の当該の梵文 taccittatyāgād yāgavat は、当該の文脈ならびに『中観五蘊論』および『牟尼意趣莊嚴』藏訳によって taccittatyāgāt tyāgavat と改める。

⁸⁸⁾ AK, IV, 26.

まさにその二つは、〔身体の動きや発話を〕引き起こす心を〔他者に〕知らせるもの (vijñāpana) だから、表 (知らせるもの vijñāpti) である⁸⁹⁾。

一方、表と類似した法であって、投げ入れたり (または牽引したり) 支えたりする諸大種に依拠してから生じ、表の如くに他者たちに知らせることがなく、ただ教えのみによって理解され、比丘など (八衆) を規定する原因、これが無表である。〔それはまた〕実在 (dravayasatī) であって、色蘊に含まれる。それ (表) との類似を否定するから〔無表と呼ばれる〕。例えば、〔クシャトリヤたちを〕非バラモンと呼ぶように。

Annotated Japanese Translation of the Sanskrit Text of the *Munimatālaṃkāra*: the First Half of the Sarvadharma Section

Summary

The *Munimatālaṃkāra* of Abhayākaragupta (composed 1113) is an encyclopedic overview of the entire system of non-tantric Buddhist doctrines and practices. Recently the existence of a Sanskrit manuscript was reported by Li Xuezhū, and the textual study of the *Munimatālaṃkāra* is drastically evolving. Li and Kano have already published several portions of the Sanskrit text including the *sarvadharma* section, while Akahane and Yokoyama have published the text of its corresponding Tibetan translation of the same section. The aim of the present paper is to present an annotated Japanese translation of the first half of the section, in which Abhayākaragupta establishes the all *dharmas* extracting a number of passages from Candrakīrti's *Madhyamakapañcaskandhaka*.

<キーワード> Abhayākaragupta, *Munimatālaṃkāra*, Sarvadharma, Candrakīrti, *Madhyamakapañcaskandhaka*

(本研究は、科学研究費課題番号 26284008、253700592、25284014 による研究成果の一部である。)

⁸⁹⁾ 割注「この男に「行こう」という知が生じて、行って座るために、という如し」。